



渋谷駅の改札口とホーム

東京都心最後の地下鉄、最新鋭の技術を駆使して完成した副都心線が予定通り、6月14日（土）の一番から運行を開始した。和光市駅では、早朝から満員となった。

急行が走って追い越しをするメトロのスピード感に満足した人は多かったが、ダイヤには狂いを生じ、たちまち十分以上の遅れが出た。

新宿三丁目駅の特設窓口で発売された記念の一日乗車券二万枚はすぐ売り切れた。

終点の渋谷駅では、横浜に向かう「東急」の延伸工事の気配がもう感じられ、四年後に完工予定の「川越」から南下して「一挙に「東海道」へと結ばれる路線も市井の話題となってきたようだ。

ただしこの熱気とともに、東武東上線、西武線との複数の乗入れにより交錯する運行システムには次々と不調が現われ、翌日にはダイヤの一層の遅れ、相互乗入れの中止、さらに変電所のブレーカーが落ちる事故が発生した。

この路線の特色の一つは、今まで馴染みの薄かった個性的な町をつないでいること。新宿、渋谷、池袋の繁華街からはかけ離れた静かさが味わえることである。

東京メトロ副都心線と東武東上線西武線との相互乗入れはじまる



「渋谷駅」の中央、ホームが天井から見える話題の「吹抜け」もう横浜に向かうレールの接続地点が眺められる

新宿三丁目の「北参道」から明治神宮の北参道の大鳥居は間近で、また千駄ヶ谷に向かうと、国立能楽堂がある。

（金）夕刻から特設舞台では、能楽囃子「神舞」「獅子」が演奏され、明治神宮代々木雅楽会によって神楽「代々木の舞」「舞楽」「蘭陵王」が奉納された。また「なら燈花会」によって二千個の灯りが点された。

町内会連合が主催する開通前夜祭は、他の地域では真似のできない「幽玄なる祝い」が繰り広げられた。会場は明治神宮北参道大鳥居前の広場、13日



のよう横に掘る「シールド工法」が約3/4も採用され、従来の地上から掘る工事は最低限に抑えられた。また交差する既設の地下鉄とのわずかな隙間にトンネルと線路を通すため

副都心線の完成で、世界の先端を行く地下土木技術を実証・・・都内を走る既設の地下鉄の深さは二十メートルを越え、否応無しに新規の地下工事は一層深くなり、コストは増大する。副都心線は都内で最深となるが、新しいモグラのように横に掘る「シールド工法」が約3/4も採用され、従来の地上から掘る工事は最低限に抑えられた。また交差する既設の地下鉄とのわずかな隙間にトンネルと線路を通すため

池袋から一駅の「雑司が谷」駅では、都内に残されたたった一つの都電、「荒川線」に乗り換えができる。安産と子育ての「鬼子母神」に近い。



に、従来線の重さに耐える十分な補強工事を行なった。周辺にはN.T.T.の通信網、東京電力の電力線、東京ガスのパイプが錯綜して、それらの沈下にも配慮が欠かせない難工事だった。

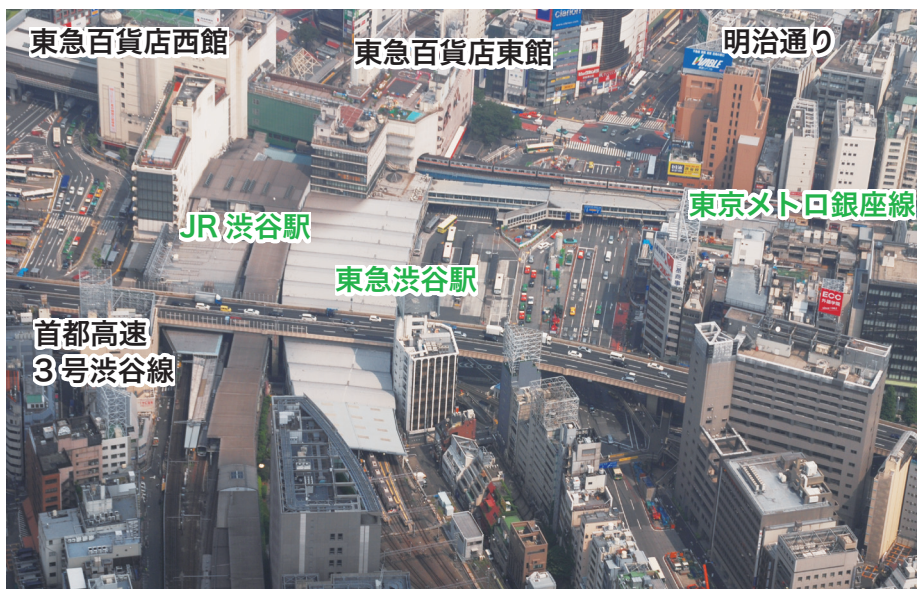
メトロ副都心線の課題

営業の初日からトラブルが相次ぎ、各駅停車が誤って駅を通過する、あるいは各駅停車が急行電車の軌道に入るなど、混乱は収まらなかった。

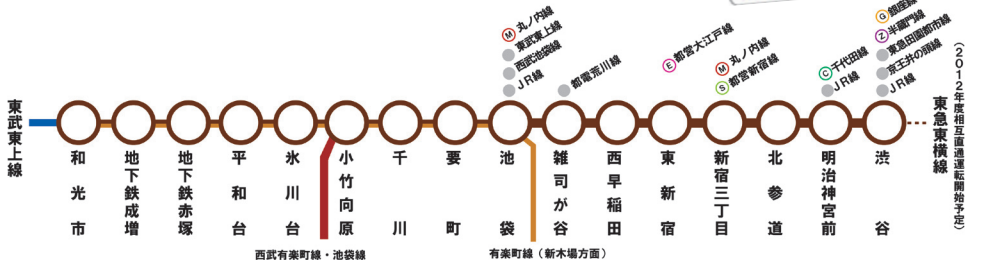
副都心線は東武東上線と西武池袋線が相互乗り入れしている。運行マニュアルでは、乗り入れ電車が遅れた場合、後発予定の電車を先に出発させ、運行を調整することになっている。しかし待たせるべき指令のミスも続出した。

池袋、渋谷間で折り返し運転に切り替え、JRや東武、西武などへの振替え輸送も行われ、車両に搭載されている自動列車運転装置に不具合が生じて車両やホーム柵ドアのトラブルも起った。

東京メトロ副都心線には、新たな大動脈としての期待が大きいだけに、利用者の不満が噴出した。相互乗り入れの他社路線への影響も大きく、トラブルが長引けば首都圏の鉄道網全体に不安を広げる恐れもある。メトロはこれをもって新線建設が打ち止めとなるので



JR、東急「渋谷駅」周辺。メトロ渋谷駅は明治通りの真下にある





地元民の親子。左端は漢人のガイド

このエッセーを書いたのは
2005年12月です。

現代の我々は、ともすれば、経済活動に目を奪われて、内面のことと向き合うことは疎かになっているようだ。確かに技術、経済で世界をリードしているが、これからは、遠い国、近い国、そこに暮らす人々のことを理解し、文化、環境を基盤とする、グローバルマインドをもった「地球市民」として自覚めるべきではなからうか・・・



9・ボン教と仏教の習合

チベットには、仏教が伝わる前から「ボン教」(またはボン教)と言う土着宗教があった。これは自然崇拜教で、「山にも川にも神々がいる」と信じられてきた。そして、ボン教は、日本における神仏習合と同様に、仏教と習合し、現在に至っているのである。従って、チベットでは山の神、川の神、諸々の神様が遍在しておられると、現地ガイドの説明があった。以前駐在していたブラジルには、一神教のキリスト教(カトリック)と、黒人奴隷が持ち込んだアフリカの土着宗教とが習合して「カンドンブレ」と言う宗教があった。宗教や宗派がいちみち、殺し合う現実だけでなく、共存してきたケースも世界には沢山あるのだ。これは私にとって嬉しい発見だった。

中国の「業」
私は想う 深瀬 克

今から40年以上も前のことだが、私は大学のゼミに、マルクス主義経済学の真つた中にある「労働経済」を選んだ。マルクス主義では、「資本主義が、発展すると、独占資本主義、帝国主義の段階に入り、資本家による労働者・農民からの搾取・収奪が進み、労働者・農民は、「絶対的窮乏化」におちいる。この結果、プロレタリア革命が必然的に起こり、プロレタリア独裁による共産主義社会が実現する」と言われて来た。いわゆる「唯物史観」である。

しかし、共産主義による社会システムは、立ち上がりこそ、旧来の支配階級からの開放により歓迎されるが、人間性を無視した社会体制であるため、時の経過と共に、経済発展の停滞、文化の破壊、共産党上層部による権力闘争などが起こり、決して理想的な社会システムではないことが明白になる。絶対的窮乏化」は、資本主義先進国で必然的に起こることはなかったが、共産主義社会では、共産党幹部の権力闘争が必然的に発生し、「絶対的権力闘争化」に陥った。これは「権力闘争に勝ち残らなければ自分自身が抹殺されてしまう」と言う、共産主義社会システムに内在する宿命、すなわち「業」だと私は思う。



今の上野駅にはモダンなモニュメントが翼を広げている。神幸祭の宮出しを控えて、下谷神社の千貫神輿が鎮座して、上野の歴史の重みを演出した。



数年後東京駅に延伸されるので、北の玄関としての上野駅ホームは、そのとき役目を終る。



会館の屋上に西郷さんの銅像が見える



西郷会館は、そのレトロな外観を一新し、2010年暮れに完成予定



集団就職・出張を支えて50年 上野駅前の上野百貨店(西郷会館)が消える

一同会館2階の聚楽台は閉店ー

東京・上野駅前、西郷隆盛像の下に位置し、昭和の面影を残してきた「西郷会館」が建物の老朽化に伴い、その半世紀の歴史に幕を閉じることとなった。

西郷会館は、丘の地形を利用した建物で、設計者は土浦龜城。鉄筋コンクリート造の四角い箱形のデザインで、昭和初期のモダニズム建築の先駆けだった。

1952年、駅周辺の露店約40店を収容する共同店舗ビルとして建てられた。上野駅は、1964年の大ヒット曲「あゝ上野駅」で「おいらの心の駅だ」と歌われた「北の玄関口」。中卒の「金の卵」や出稼ぎ者が降り立つ上野駅は、故郷へ帰る列車の始発駅でもあったので、会館内にある「聚楽台」は、そうした上京者達が上野駅に降りた後や、古里に向う前の一時を過す食堂として繁盛した。

土産屋が並んだ1階ののれん街は2003年頃から大半の店が立ち退いた。そしてこの西郷会館のシンボルとも言えるレストラン「聚楽台」も、4月21日に多くのファンに惜しまれながら閉店した。

高度成長期には、地方からの学生や集団就職の若者、観光客などで大いに賑わったのだが、1991年、東北・上越新幹線が東京駅に乗り入れると、上野駅はもはや東京の玄関口ではなくなってしまう。



チベット紀行(後編)

深瀬 克

遠い国、近い国のことを
もっと知りたい・・・
そこに住む人々の暮らしを
理解したい・・・



ラサにあるポタラ宮

サンスクリット語の「pothaka」は観世音菩薩が住む(あるいは降り立つ)と伝えられる山の名前である。日本では「補陀落」と訳されている。チベットでは代々のダライ・ラマは観世音菩薩の化身とされており、その住まいであり墓所でもある「ポタラ宮」も、「pothaka」にその名を由来する。

朝、番に拝観しようと、8時過ぎにポタラ宮に着いた。見ると、すでに大変な混雑であった。こんなに大勢の拝観者がいるのかと驚いた。しかし、そうではなかった。巡礼者が、マニ車を手を持ち、お経を唱えながら、ポタラ宮を周回する巡礼道を行っていたのだ。ポタラ宮の中に入ると、部屋によっては、「五体投地」の札押をしている人達がいいた。チベット人は、お金と時間が出来たら、巡礼に出かけると聞いていたが、まさにその光景が目の前に広がっていた。

われわれ日本人は、太平洋戦争に負けた理由を、「精神力」が物量作戦を支えた経済力に負けたと理解した。その結果、戦後の日本は「精神論」を捨て去り、「モノ」と「お金」中心の「経済」に刃向になり、驚異の経済発展を遂げることが出来た。しかし、チベットの人たちは、明らかにわれわれと対極の価値観の中に住んでいる。

今の世界は、科学技術と資本力のある軍事大国が、自分の持っている価値観・システムが最高レベルに進化したものであると過信し、他国の独自性を軽視し、自国に同化させようとしている。いわゆる「文明の衝突」である。われわれは、「文明の衝突」を増幅させるのではなく、収束させるにはどうしたらよいのか、考え、提案し、行動すべきなのだろう。

7・鳥葬

チベットで「鳥葬」する場所を見ることが出来ないかとガイドに聞いた。漢族のガイドは嫌がって頭を横に振った。岩山の麓を通ったとき、この上で「鳥葬」が行われると言った。

なぜ「鳥葬」などというやり方があるのか、ガイドの説明はこうだった。『ここは燃料にする木が少い。従って「火葬」できるのは、金持ちに限られる。お金の無い者は、ハゲワシの餌になって天に昇る。』で葬られる。その次の葬り方は「水葬」で、白い布で全身をぐるぐる巻きにし、早朝、ヤルツァンボ川に流す。「土葬」にされるのは、罪人。地下は地獄があるところだから。』とのことだった。

日本では、数十年前まで、「土葬」が一般的だった。我々から見ると「鳥葬」などゾックとするが、彼らから見ると「土葬」こそゾックとするにとらう。文化の違いについて、



ポタラ宮の周囲を歩く巡礼者

「問答修行」で有名なセラ寺は、ラサの北8kmの山の麓にある。14世紀末、ツォンカバ(ダライ・ラマ3世)が、それまでの退廃的な仏教に飽き足らず、戒律を厳守するゲルク派を興した。いわば原理主義による改革である。この寺は、彼の弟子が1419年に創建したもので、現在もゲルク派の代表的な寺である。最盛期には5500人もの僧侶が修行をしていたそうだが、中国共産党による「開放後」の今は、500人ほどに減らされている。このセラ寺に、100年以上前日本から、河口慧海が勉強にやってきたのである。なぜ慧海はチベットにやって来たのか。

河口慧海は1866年(慶応2年)、樽桶製造業の長男として大阪の堺に生まれた。

小学校の教員になるが、哲学館(現、東洋大学)の通信講座がきっかけとなり、22歳で上京。本所の黄檗宗五百羅漢寺に寄宿し、念願の哲学館に学んだ。1890年(明治23年)五百羅漢寺の住職より、得度を受け、慧海仁広と名づけられた。住職の引退で同寺の住職になったが、26歳のとき、哲学館を終了し、住職も辞して僧籍を返還、宇治の黄檗山で切蔵経を読むことに専念した。その結果、仏教をもっと理解し研究するには、既存の漢訳經典の他に、サンスクリット語の原典、ないしは、原典に最も近く忠実に翻訳されているチベット語訳經典が必要であることを痛感し、危険を承知の上、鎮國中のチベット入りを決意した。まず、パリ語を学んでから1897年(明治30年)日本を出発、インドでチベット語を習得し、想像を絶する困難をおかしてヒマラヤを横断し、1900年にチベットに潜入。カラス山に詣でた後、1901年ラサに到着した。ラサのセラ寺で1年余り勉強・修行に励んだが、日本人である

住職と言うポストを捨て、仏教の核心を掴もうとする河口慧海の向学心・探究心・宗教心・企画力・実行力・精神力は、いづれも卓越していたに違いない。青木新門さんが著書「転生回廊」の中で、パスカルの「思想録」から「人間は小事(＝世事)」には無感覚である(＝信仰)には無感覚である」との言葉を引用されていたが、慧海は文字通り「小事を捨て、大事に専念した」と言える人間である。いわば、「日本」の三蔵法師だとは私は思う。セラ寺の庭で今も行われている「問答修行」は、いささか観光客を意識しながらやっているように見受けられたが、慧海はさぞかし真剣にやっていたことだろうと思う。



セラ寺の問答修業

志木第九の会 定期演奏会

9月7日(日) 午後二時半開演

志木市民会館パルシティ 入場料 三〇〇円

ドヴォルザーク作曲

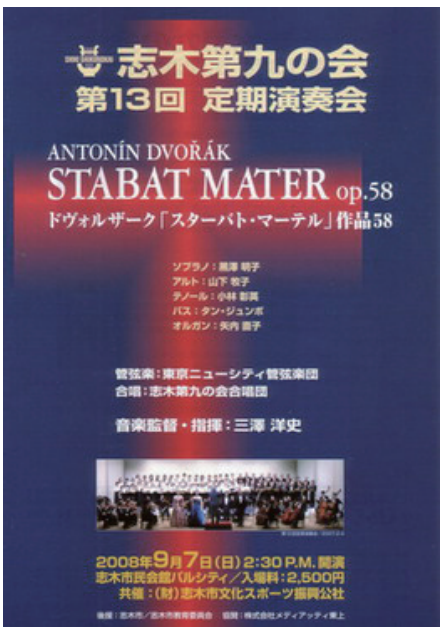
「スターバト・マーテル」(悲しみの聖母)

音楽監督・指揮：三澤洋史

管弦楽：東京ニューシティ管弦楽団

合唱：志木第九の会合唱団

ソプラノ…黒澤明子 アルト…山下牧子
テノール…小林彰英 バス…タン・ジュンボ
オルガン…矢内直子



お問い合わせ：事務局 岡嶋
TEL/FAX 048・473・6368

今回演奏されるこの作品は、ソプラノ、アルト、テノール、バス、合唱、オーケストラから編成される大曲である。

1875年9月、ドヴォルザークは長女を失う不幸に見舞われ、1876年2月この曲に着手、5月にはスケッチを完成させたが、他の仕事に手を取られてこの作品は棚上げにされていた。ところが、1877年8月に次女を、9月に長男を相次いで失い、彼らの冥福を祈る意味でこの作品に再び向かうと、11月13日にはオーケストレーションを完成させた。全10曲中アレグロで書かれているのは、終曲の後半のみで、あとはすべて緩徐な曲である。また、10曲中4曲が長調の曲であり、深い悲しみを克服して穏やかな平安を得ようとする真摯な祈りに満ちた作品と

なっている。

初演は、1880年12月23日、プラハ音楽芸術家協会の定期コンサートにおいてアドルフ・チェフの指揮により行われた。

今回の演奏会で指揮をとる三澤洋史氏は国立音楽大学声楽科卒業後、指揮に転向。1984年ベルリン芸術大学指揮科を首席で卒業後、オペラ、オラトリオなど声楽を伴う作品の指揮者として活動し、現在新国立劇場合唱団の指揮をされている。

志木第九の会は、1991年3月の志木市市制施行20周年記念「ベートーベン第九交響曲」演奏会の後、これに参加した市民合唱団を母体とし、同演奏会を指揮された三澤洋史氏を音楽監督・指揮者に迎え、さらに、安藤常

光氏ほか四名を指導陣に仰いで、91年9月7日に発会し、練習を開始した。また、92年3月には会員有志による男声合唱団「志木グリークラブ」が発足し、社会福祉施設への慰問等で活動している。本会は、深い人類愛と永遠の平和を希求するベートーベンの「第九交響曲」の合唱を歌うとともに、音楽活動を通じて、会員相互の「心のハーモニー」を図り、ひいては地域の音楽文化の向上に寄与することを掲げている。

会員は、志木市のほか、近隣の和光、新座、朝霞、富士見の県内各市をはじめ、東京都区内にもわたる市民混声合唱団で、合唱について豊富な経歴をもつ会員がいるほか、未経験者も多数在籍している。

は、スラブ民謡風の主題をブラームス流の古典的な様式に織り込んだ作品だった。ドヴォルザークの音楽をとりわけ魅力的にしているのは、親しみやすく美しいメロディーである。

このように音楽家としての栄光に向かって踏み出し、憧れの伴侶をも得たドヴォルザークだったが、その家庭はしばしば不幸に襲われた。1875年から2年間に、3人の子供達が相次いでこの世を去ったのである。

ボヘミア楽派とも言われ、民族的な作曲家、チェコの愛国的な音楽家として名声を得たが、イギリス楽友協会からも名誉会員に推された。いくつもの交響曲の作曲を依頼され、イギリス訪問は九回にも及んだ。

ボヘミア楽派とも言われ、民族的な作曲家、チェコの愛国的な音楽家として名声を得たが、イギリス楽友協会からも名誉会員に推された。いくつもの交響曲の作曲を依頼され、イギリス訪問は九回にも及んだ。



ドヴォルザークとその音楽

1841年、チェコの首都プラハの北、モルドウ河畔の町で生まれ生まれたドヴォルザークは、幼くして音楽的才能を認められた。バイオリン、オルガン演奏のほか、音楽理論を学ぶ機会にも恵まれた。経済的には苦しい環境にあつたが、プラハの音楽学校に入学することができ、卒業後には、新設が決まった国民劇場(当時はまだ仮設だった)のピアノ奏者となり、指揮者スメタナの教えを直接受ける機会を得た。ワグナーに惹かれ、彼の影響の下で作曲を試みていたが、徐々にワグナーへの傾倒が

1874年、ドヴォルザークはオーストリア政府の国家奨学金の審査に応募し、高額な奨学金を獲得した。そのとき審査員を務めていたブラームスが彼の歌曲に注目したことから、ブラームスとの親しい交際が始まり、ドヴォルザークの名はヨーロッパ中に広まっていた。彼が人気作曲家として名声を決定づけた「スラヴ舞曲」

「新世界より」と呼ばれる交響曲第九番は、アメリカから祖国のボヘミアを思いつつ作曲されたと言われているが、強烈なホームシックに襲われたため、周囲の説得を退け、

「新世界より」と呼ばれる交響曲第九番は、アメリカから祖国のボヘミアを思いつつ作曲されたと言われているが、強烈なホームシックに襲われたため、周囲の説得を退け、

「新世界より」と呼ばれる交響曲第九番は、アメリカから祖国のボヘミアを思いつつ作曲されたと言われているが、強烈なホームシックに襲われたため、周囲の説得を退け、

長倉淑乃さん逝く

ペンネーム榎木淑乃さんは志木市の生れ、志木市で育った。女流作家として、雑誌「すばる」に作品を発表、文壇では既にお馴染みの作家だった。



かつての志木を語った名作「武蔵野物語」で、地域の誰からも愛されていた小説家の「永倉万治」は彼女の兄になる。

万治は「埼玉県の百人」に選ばれた郷土の誇り、兄万治の思い出の「東京キッド」取材するために、三年前のこと、淑乃さんはニューヨークに赴いて取材をつづけ、帰ってきた黄金バット」を集英社から上梓、兄を憶つて書き続けた妹の心意気は、文壇から絶賛を浴びた。まだ昨日のこのように思えるのだが。

去る三月彼女は突然帰らぬ人となった。享年五十二歳。

亡兄万治と語り合つてから、天国で安らかに眠つて下さい。

合掌

市民フォーラム編集人記す

本NPO市民フォーラムが編集する



第7号 江戸城完工

この人：仁科芳雄
芥川龍之介「舞踏会」「手巾」
東京ミッドタウン
旧朝香宮邸のオール・デコ
武蔵野台地



第8号 山手線誕生の物語

この人：長井 長義
國木田独步「武蔵野」
東京都庭園美術館
消滅した羽田3町
品川神社大祭

特定非営利活動法人 NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

◇読者の「オピニオン」(意見／考案)を募集します。

TEL090(3048)5502

編集部 原宛にどうぞ

B5版 100ページ(カラー50ページ) 定価 各630円

みやかわ(宮川書店)本店に全巻常置されています
志木市本町1-11-32 TEL: (048)487-1112